

開催地名	福島県 猪苗代町
開催日時	令和6年8月23日(金)10:00~12:00
開催場所	猪苗代町役場
語り部	菅原 康雄(宮城県仙台市)
参加者	総務課職員、婦人消防連絡協議会 30人
開催経緯	講演にて東日本大震災の教訓や、震災時における心構え、注意点を伺う事で、災害時に自身の身を守るための知識を得る機会としたい
内容	■ はじめに 講演者の菅原康雄氏は、宮城県南三陸町の元消防職員であり、東日本大震災を経験した後、全国各地で防災の語り部として活動している。消防職員として長年防災に携わりながら、震災時には住民の避難誘導に尽力し、命の重さと避難行動の重要性を深く認識した。今回の講演では、震災当日の出来事や避難の課題、そして今後の防災対策について語られた。 菅原氏は、「防災は知識として持っているだけでは不十分であり、実際に行動に移せるかどうかが生死を分ける」と述べ、震災の経験をもとに、いざというときにどのように動くべきかを具体的に説明した。 ■ あの日のこと 2011年3月11日、東日本大震災が発生し、菅原氏が住んでいた南三陸町は巨大津波によって壊滅的な被害を受けた。 震災発生直後、消防職員として町内の避難誘導に当たったが、想定をはるかに超える津波が押し寄せ、町の多くが水没した。防災対策庁舎にいた多くの職員が津波に飲み込まれ、助けに向かうことすらできない状況となった。 津波の高さは16~18メートルに達し、町のほぼ全域が浸水。従来の想定をはるかに超える規模であり、専門家でさえ予測できなかった未曾有の災害だった。特に、避難の遅れが多く、命を奪ったことが大きな教訓として残った。迅速に行動した人は生存率が高かったが、「まだ大丈夫」「自宅で様子を見る」と判断した人々の多くが命を落とした。津波は、最初の波が来た後も繰り返し押し寄せ、予想よりも高く、より深刻な影響を及ぼした。 ■ その後のこと 震災後、南三陸町では復興が進められたが、多くの課題も浮かび上がった。 避難所では、初期の段階で食料や水が不足し、トイレの環境も劣悪だった。特に高齢者や障がい者の支援が十分でなく、避難所生活が長引く中で健康を害する人も多く見られた。自治体の支援体制は機能していたものの、想定以上の避難者が押し寄せ、行政だけでは対応しきれない状況となった。 また、多くの住民が「まさか自分の町が壊滅するとは思わなかった」と語り、震災前の防災意識の低さが被害を拡大させた要因の一つだった。震災後、地域全体で避難訓練や防災教育の強化が進められ、住民一人ひとりが防災の重要性を再認識するようになった。 町の再建においては、被害の大きかったエリアを「津波危険区域」として指定し、住宅の再建を禁止する方針が取られた。新しい住宅地は高台に移転し、商業施設は津波を考慮したかさ上げ区域に配置された。 ■ まとめ 菅原氏は、「防災対策は特別なものではなく、日常生活の中で意識し続けることが重要だ」と述べ、今後の防災対策として以下の点を強調した。 まず、早期避難の重要性が挙げられる。避難指示を待つのではなく、自らの判断で早めに避難することが命を守る鍵となる。特に津波は、想定よりも高くなる可能性があるため、「この程度なら大丈夫」と考えるのではなく、最悪の事態を想定して避難することが求められる。 次に、避難所運営の改善が必要である。震災時の教訓を踏まえ、トイレや食料の備蓄を増やし、衛生環境を整えることが求められる。また、女性や高齢者、障がい者の立場に立った避難所運営を考え、安心して過ごせる環境を整えることが大切である。 さらに、防災教育の強化が重要となる。特に、子どもたちに正しい避難方法を教え、家庭でも防

	災について話し合う機会を増やすことが求められる。防災訓練を定期的を実施し、実際に避難行動をシミュレーションすることで、いざというときの行動がスムーズになる。 また、地域防災の強化が必要である。自治体だけに頼るのではなく、住民同士が助け合う「共助」の意識を持つことが、災害時には大きな力となる。避難所では役割分担を決め、混乱を防ぐ仕組みを整えておくことが重要である。 最後に、菅原氏は「災害は必ず起こるものと考え、事前に備えることが大切だ」と述べ、防災意識を持ち続けることの必要性を強調した。そして、「津波が来たらすぐに逃げる」「日頃から防災を意識する」「助け合いの精神を持つ」ことが、未来の命を守ることにつながると締めくくった。  
開催地より	災害の恐ろしさ、避難の課題など実際にご経験いただいた内容を説明いただいたおかげでより現実として講演を聞く事が出来た。早期避難・運営課題等子の講演で聞いた内容を今後の活動の参考としたい。